

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

醍醐龍馬

【所属】(助成決定時)

小樽商科大学

【研究題目】

大津事件をめぐる明治中期日露関係

【研究の目的】(400字程度)

明治 24 年に発生した大津事件は、司法権の独立を守った事件として主に法制史から注目度されている。しかし、本事件を外交史的に考えても、明治 8 年の樺太千島交換条約後の日露関係に 15 年ぶりに浮上した緊急課題として重要な意義があるように思われる。日本中を震撼させたこの事件は、開戦の格好の口実になり得たが、ロシア側からは復讐戦どころか、損害賠償の要求すらなかった。なぜ大津事件は、第一次世界大戦を引き起こしたサラエヴォ事件のような結末には至らなかったのか。先行研究では、日露戦争以後の日露接近から第一次世界大戦後の日露協商の時代のみ日露友好の文脈で捉えられることが多い。これに対し明治初期と中期の接続を図る本研究が完成すれば、樺太千島交換条約後の一定期間にも「友好」の時期があったことを体系的に実証し、長期的には「対立の延長」で描かれがちな日露戦争像に修正をもたらし得る。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、大津事件の収束過程とその意義を日露関係の中で考察する。まず、樺太千島交換条約以後の対露外交の主導者を中心軸に据える。従来大津事件研究で注目されてきた人物は、司法の独立を守ったとされる大審院長の児嶋惟謙である。このような法制史の見方に対し、外交史から見た場合に注目すべきは外務大臣榎本武揚や元老黒田清隆、駐露公使西徳二郎などの知露派を中心とした外交主導者であろう。事件が発生すると、元老黒田清隆は知露派の榎本を外相に据えた。同時に、当時の駐露公使西徳二郎も、樺太千島交換条約締結時に榎本の部下として働いた薩摩出身外交官だった。明治初期に対露外交を成功させたメンバーは、日露関係の緊迫化に伴い再び日本外交の前線に浮上し対露関係の修復を図る。このことを踏まえつつ、従来注目されてこなかった彼らの動向や、ロシア海軍文書館及びロシア帝国外交史料館の史料からロシア側の動向を解明しつつ事件収束の過程を検討した。その際には次のような国際政治と国内政治の構造的要因にも留意した。

第一の国際的要因については、東アジアにも波及したグレートゲームと呼ばれる英露対立を軸とした多国間関係の中で日露関係を多角的に考察した。その際注目したのは、ロシアによるシベリア鉄道敷設である。皇太子ニコライはウラジオストックで行われるシベリア鉄道起工式に出席のため日本に立ち寄ったのだが、このようなロシア極東開発の促進はイギリスを刺激していた。第二は国内的要因であり、藩閥政府と政党や世論の対立、さらに藩閥政府内の対立が、日本の対露外交に与えた影響を検討した。これによって、従来のような死刑論をめぐる内閣と司法部の対立、といった枠組みだけでは分からない政治状況を踏まえながら黒田、榎本らの動向を位置づけた。

【結論・考察】(400字程度)

大津事件の穏便な収束の背景には、樺太千島交換条約以来の信頼感が根底にあった。また、ロシア側としては、イギリスと対抗する中、シベリア鉄道が着工されたばかりで東アジア政策を未だ本格化させていなかったために対日政策で穏健な態度をとらざるを得なかった側面もあったと思われる。そして、かかる国際情勢下で日露関係を調整しきったのが対露外交の主導者となっていた知露派の存在だった。彼らはロシア側からの受けもよく、事件処理の交渉を有利に進めた。特に外相榎本に対するロシア側の信頼感は大きかった。このような要因が複雑に絡み合いながら、大津事件は当初想定されていたような事態にはならず収束していったのである。今後、以上のような結論をより確実に実証すべく収集した史料の分析を進め、論文としての成果公表に繋げたい。